



豊かで温かいコミュニティの創出
～人生100歳時代のソーシャルプラットフォーム～

Eコンシェルジュ事業ご説明

2021年11月11日



日本テレネット株式会社

Eコンシェルジュ準備室

室長 古市 寛治

1-1. Eコンシュルジュ事業の基本コンセプト

「豊かで 暖かい コミュニティの創出」

Omsorg(オムソーリ)+Lagom(ほどほど)

喜びも悲しみも **共に分かち合える共生の理念**

地域社会サービス(福祉・医療・教育)

1

Community Service Platform (CSP) の構築

Ethical economy(エシカルエコノミー)

2

AIoTによる、シニア層のSmartな暮らしの実現

Circular economy(サーキュラーエコノミー)

3

持続的な地域経済成長の仕組み創り

1-2. Eコンシュルジュ事業の理念と目的

共生 / 共助の社会・経済の再構築

Eコンシュルジュが事業で提供すること

1

新たな社会インフラとなる
Service Platformの構築

2

公益資本主義的地域主体の
あるべき姿の形成

- ・地域住民・地域企業
- ・地域金融機関
- ・プラットフォーマー

3

地域Service Supplierと
ともにエコシステムを形成

共生・共助

人生100歳時代に向けて
健康寿命の延伸

豊かであたたかな人生を楽しめる
コミュニティ創りへの住民参加

コミュニティにおける
安心・安全の社会基盤構築

1. Eコンシェルジュ事業の果たすべき使命

綱領

輝ける日本の未来を構成する一員として、日本伝統の「利他」の精神に基づき、21世紀型「三方よし」の社会・経済を再構築し、人類社会のさらなる発展に貢献する

信条

公益資本主義の理念に基づき、新しい循環型社会システムを実現する

- ・「共生」: 人と地域と企業がステークホルダーとして共生する社会を実現する
- ・「共助」: 利を分かち合う共助によって持続的な幸福を得る社会を実現する

行動指針

＝AIで人々の暮らしに寄り添い、豊かで温かな共助のコミュニティを創出するプラットフォームの展開で、シニア層の健康寿命の延伸を実現する＝

I. 「幸せのアプリ」を実装

…幸せのヒエラルキーを基に体系化、健康寿命の延伸を持続的にサポートする

II. 「In House型サービス」を実装

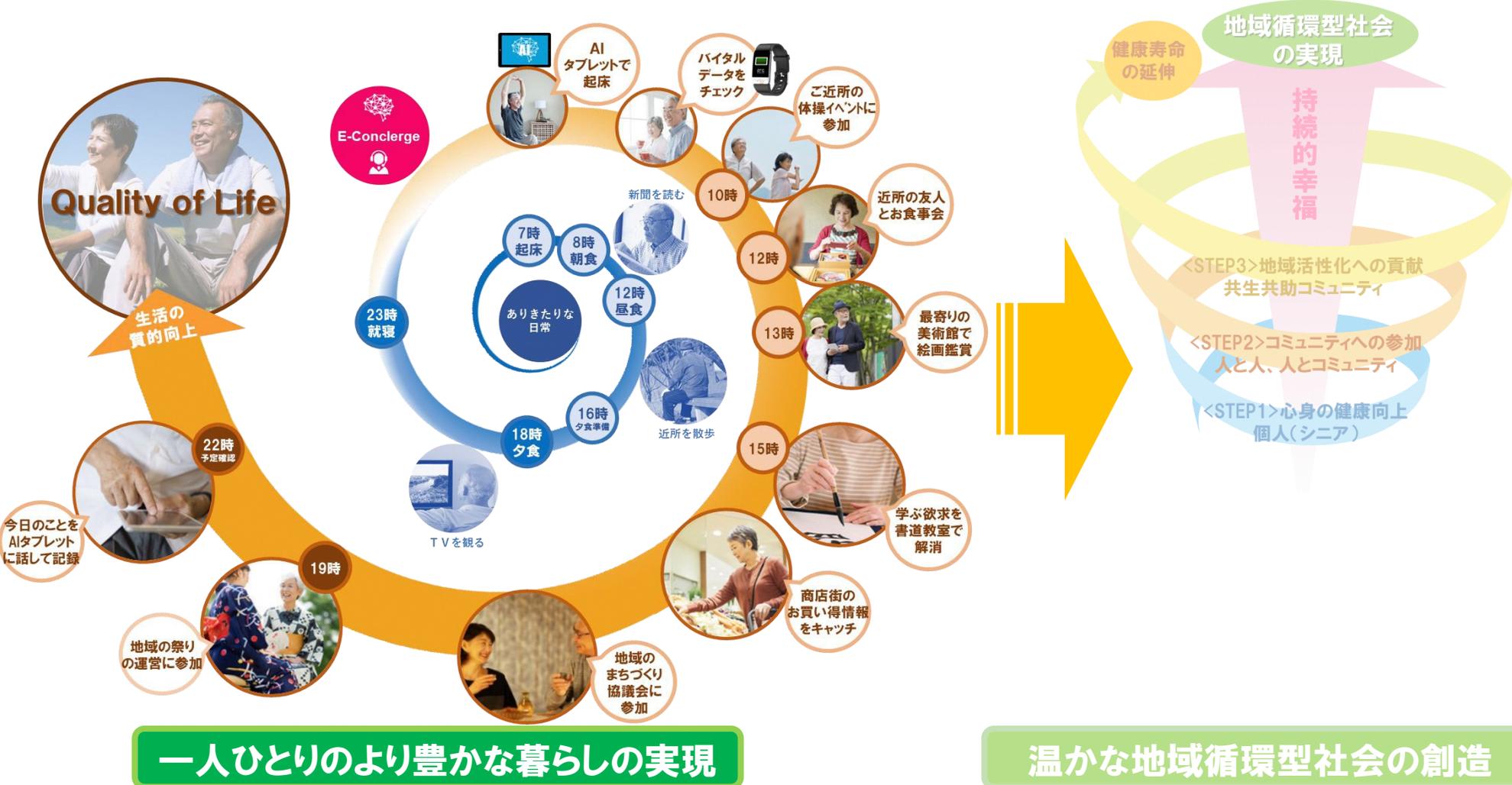
…自宅に居ながら「サービス付き高齢者向け住宅」に匹敵するサービスの提供で日常生活をサポートする

III. 自治体・地域運営会社との連携とサポート

…理念と地域課題を共有する行政・地域運営会社に対し、「サービスの可視化」「エコシステムの構築」「GDPRに準じた個人情報管理」の事業価値を提供

2. 「幸せのアプリ」の実装について ~幸せのヒエラルキーの研究①~

日常生活をより楽しく、便利に、快適に。一人ひとりに応じたクオリティ・オブ・ライフを実現

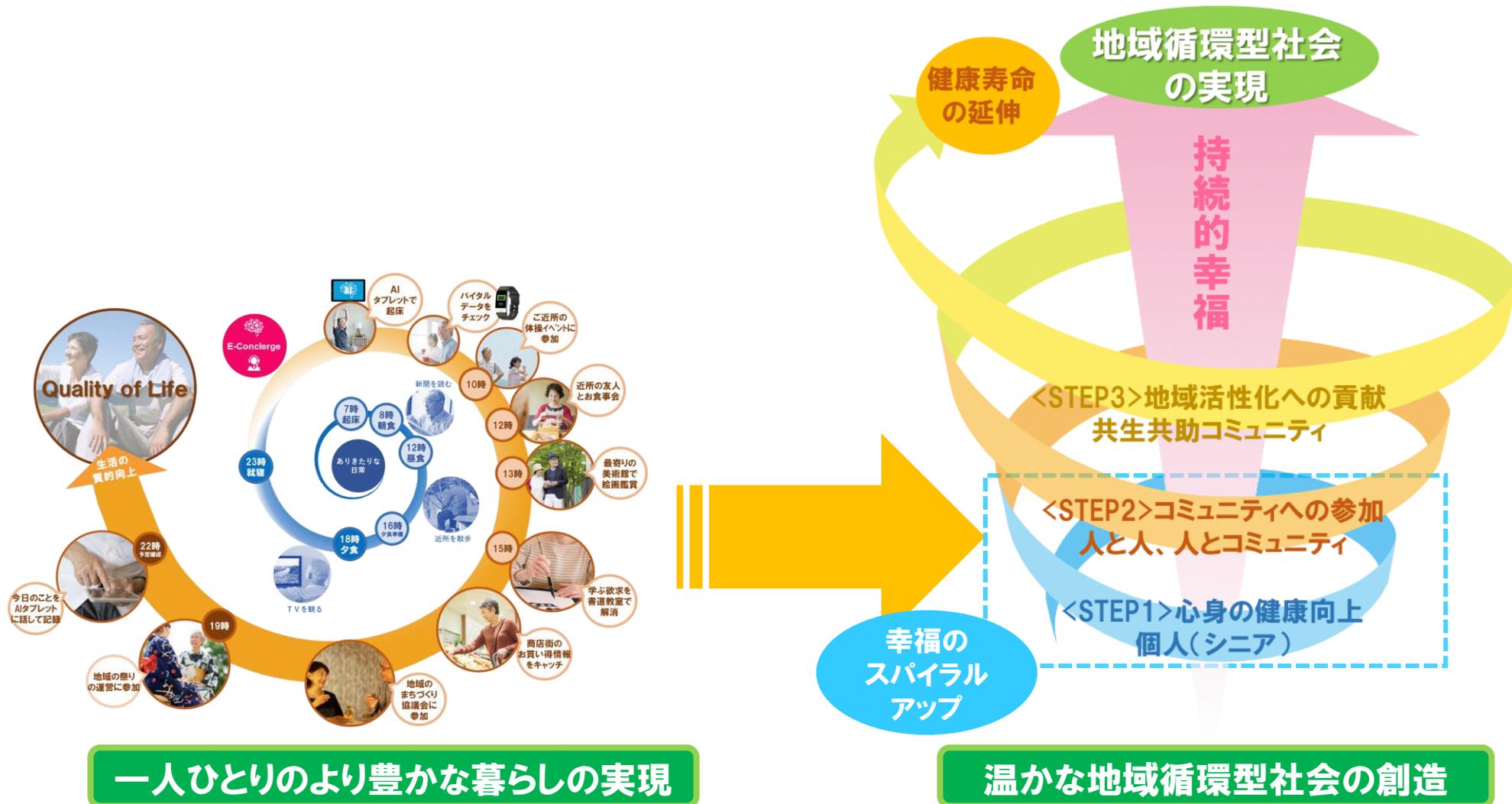


一人ひとりのより豊かな暮らしの実現

温かな地域循環型社会の創造

2. 「幸せのアプリ」の実装について ～幸せのヒエラルキーの研究②～

シニアの幸福の向上が地域コミュニティの活性化、拡大につながる



3. 基本サービスの骨格 「幸せのアプリ」・「In House型サービス」

サービスの目的

健康寿命の延伸

平均健康寿命

男性:72.14歳 女性:74.49歳

※厚生労働省「平均寿命と健康寿命の推移」2016年時点



男性:82歳 女性:85歳

幸せのアプリ

個人の幸せを拡張する
エクササイズの提供

共助、地域活性化活動への参加拡張

Step3

地域活性化への貢献(共助)

世代間交流、異なる地域、住民との交流の拡張
防災防犯活動の拡張(内から外へ)

共生、共創、協調の意識高揚

Step2

コミュニティへの参加(共生)

趣味、嗜好の仲間など人間関係の幅拡張
地元への愛着、誇り

積極性、肯定感、生活自立促進

Step1

心身の健康向上

精神的・身体的な健康維持・向上
家族との関係性の向上

In House型サービス

プラットフォーム
提供会社

地域運営会社



【サービスイメージ】

安心

安全

便利

“サービス付き高齢者住宅”に匹敵する
サポートの提供

- 健康管理支援
- レクリエーション
- 生活機能維持支援
- コミュニケーション
- 生活支援
- 行政サポート

4. 3つのAI/ハイパープラットフォーム/各種サービス展開の設計



参考資料

■共同研究① 京都大学こころの未来研究センター 内田由紀子教授

個人の幸福だけでなく、集団・社会の幸福につながる 行動を促す「幸福のAIエンジン」を作り上げる

開発ステップ

- 1 幸福の指標と会話による測定手法を開発
- 2 ユーザーの行動を幸福の指標で測定・評価
- 3 幸福度を基にした独自のレコメンドアルゴリズムを開発

「AI技術 × 幸福の指標」で
社会の幸福と個人の幸福を両立する
「協調性に根差す幸福社会」を目指す



京都大学 こころの未来研究センター
内田 由紀子 教授

【略歴】

1998年 京都大学 教育学部 教育心理学科 卒業
2003年 京都大学 大学院人間・環境学研究科 博士課程 修了
2003年 ミシガン大学・スタンフォード大学 客員研究員（～2005年）
2005年 甲子園大学 人文学部 心理学科 専任講師（～2007年）
2008年 京都大学 こころの未来研究センター 助教（～2011年）
2011年4月～2019年3月 京都大学 こころの未来研究センター准教授
2019年4月～ 京都大学 こころの未来研究センター教授
京都大学 人間・環境学博士
2010年12月～2013年3月 内閣府 幸福度に関する研究会 委員
2019年9月～2020年5月 スタンフォード大学
Center for Advanced Study in the Behavioral Sciences
フェロー (Berggruen Fellow)

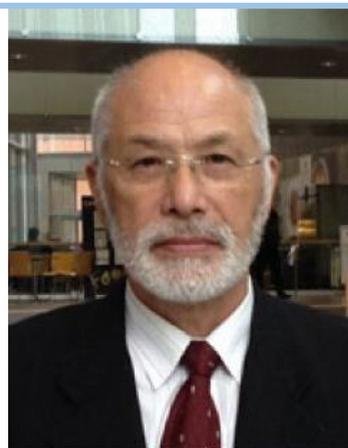
■共同研究② 兵庫大学 田中博一教授 生活機能評価 ～WHO新国際基準対応～

自らが「からだ」の生活機能状態を把握し、 いつまでも健康を持続するためのサポートシステム

開発ステップ

- 1 厚生労働省『生活機能評価』聞き取り機能搭載
- 2 データの自治体・地域包括支援センターとの共有・連携
- 3 WHO『Whodas2.0』評価12項目改良版搭載

地域包括支援システムと連携し
「地域でみまもる社会づくり」を目指す



兵庫大学 生涯福祉学部
田中 博一 客員教授

【略歴】

同志社大学文学部卒業
同志社大学大学院文学研究科修士課程修了
[所属学会]
社会政策学会、日本労務学会、社会保障法学会
[主な研究テーマ]
・介護福祉士の職務と職業能力に関する研究
・外国人介護人材養成に関する研究
・保育士のキャリアパスに関する研究

■第1次実証実験 実施概要 ～シニア層とAIスピーカーとの親和性の検証～

■実施概要

【期間】 2018年11月～2019年4月

【場所】 京都市東山区(粟田学区・古川町商店街近郊)

■実験対象

- モニター20世帯(夫婦10世帯、女性7世帯、男性3世帯)にて実施
- 平均年齢:76歳(80歳代5世帯、70歳代12世帯、60歳代3世帯)
※ うちアンケートご協力いただいた世帯は17世帯(夫婦9、女性7、男性1)

■実験対象

- 各ご家庭にAIスピーカー「アレクサ」を設置、利用状況を調査
- 古川町商店街内にコールセンターを開設し、生活のお困り事をサポート
- サポートスタッフによる定期訪問を行い、ヒアリングを実施



開所式(門川市長、山下副知事、繁本議員ご列席)



開所式の模様を京都新聞、朝日新聞、産経新聞が紹介



モニター世帯の様子

コールセンターによるサポート



モニターさんからの電話にサポーターが対応

第1次実証実験 結果と考察

1 シニア世帯とAIスピーカーの親和性は高い

- ペット感覚で使う。愛着度・満足度が高い(ともに10点満点中6.8点)
- 音声による操作性は、シニアにとって使いやすい(1, 2週間で習熟)

2 “AI+ヒト”によるサポートが必要

- AIスピーカーでカバーできない部分はコールセンターのカバーが必要
- サポーターの訪問は好評。家族以外の話し相手・相談相手が必要



サポータースタッフがモニター世帯を訪問する際の様子

3 安心安全、健康のサービスニーズが高い リマインダー・スケジュール機能が好評

スピーカーに望む機能

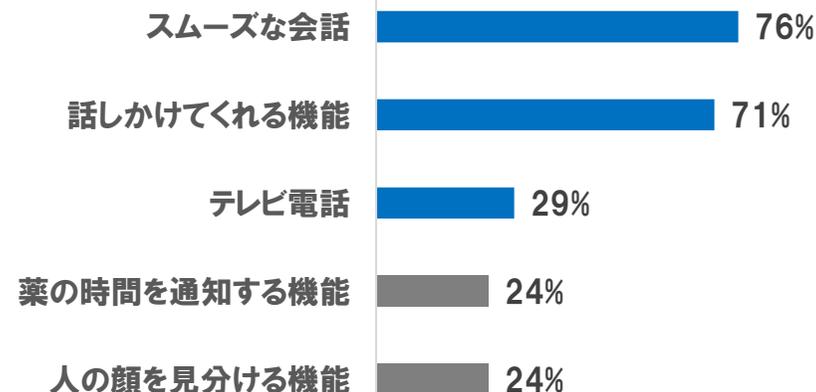


よく使う機能



4 今後、AIスピーカーに望むのは スムーズな会話、話しかけ等の会話性能

スピーカーに望む機能



2021年 社会実装実験 実施概要

■実施概要

【期間】 2021年9月～2022年3月

【場所】 京都市東山区・左京区(栗田学区周辺)

■実験対象

- モニター:最終的に150世帯
- 65歳以上健全シニア

■実験対象

- 独自プログラムを搭載したタブレットを設置
- タブレットを通じた会話ログを分析し、幸福度を計測
- 半年に1回、調査票による幸福度測定を行い、サービスの効果を評価・検証
- 『生活機能評価』を2カ月に1回実施し、専門家が分析・フィードバック
- 健康リスクのある人は、地域包括支援センター・地域医療に連携
- 行政(自治体・警察等)の情報発信を行い、効果を検証



広報番組の収録で西脇京都府知事にもご紹介



実験にはタブレットとスマホを使用

